

私たちのルーツを、 龍馬を、 『JIN -仁-』を 語ろう。

今年NHK大河ドラマ『龍馬伝』をはじめ、改めて歴史にスポットが当たった年である。折しも本学は創立130周年を迎えた。そこで、歴史に造詣の深いお二人に、歴史を訪ねる面白さや人物像の魅力などを語り合っていた。偶然だがお二人とも祖先は瀬戸内海の、当時の水軍とも関わりがあったとのこと。2012年には大河ドラマ『平清盛』が予定されており、瀬戸内海や水軍などが改めて注目されることと思う。これまた偶然だが、そうしたトレンドを、いち早く先取りした対談となった。

司会 ●「アドニス」編集部

編集部 ■ 歴史に関わる分野で活躍されているお二人ですが、自己紹介も兼ねて、どんなお仕事をされているか、まず美甘子さんからお願いします。

美甘子 ● 私は歴史が好きなアイドル、略して「歴ドル」として活動しています。一番好きな時代は幕末で、私が歴史好きになったきっかけは坂本龍馬です。今年大河ドラマ『龍馬伝』の放送もあり、龍馬に関する番組への出演をはじめ取材を受けることが多く、本も書かせていただきました。高知の「土佐・龍馬 であい博」のPR大使も務めています。

編集部 ■ 分かりました。昔から歴史は好

きだったのですか？

美甘子 ● 私は瀬戸内海の、愛媛県大三島出身です。大三島は戦国時代、村上水軍が活躍していた場所でもあり、鶴姫という女武将が島を守ったと伝えられています。その鶴姫が着ていたといわれる女性用の唯一の鎧が、大三島の宝物館に展示されています。女性用だからジャンパースカートみたいな感じで、胸がちょっと出ていて、ウエストがキュッと締まっています。ほかにも、国宝や重要文化財が展示されています。また、大山祇神社という大きい神社があり、戦に勝つために源頼朝や義経も戦勝を祈願して鎧を奉納したそうです。

本とか文字の上だけの勉強じゃダメ。大切なのは、当時の生活感や空気感。

山田順子



美甘子 歴史アイドル

みかこ ● 2005（平成17）年、文学部日本語日文学科卒業。1982年生まれ。愛媛県出身。歴史好きを生きし歴史アイドル、通称「歴ドル」として活躍中。趣味は歴史上の人物のお墓参りと、昭和の香り漂う純喫茶巡り。特技は幕末の志士達の変名や辞世の句を言うこと。日本舞踊扇崎流名取。著書：最新作は「龍馬はなぜあんなにモテたのか」（ベストブック）。
ブログ <http://ameblo.jp/mikako426/>



日本各地の三島神社の総本山であり、日本総鎮守とも呼ばれる大山祇神社。瀬戸内海海上交通の守護神として、崇敬されている。写真提供：今治市役所大三島支所産業建設課

山田 ● 大三島は、古代から海の要衝ですね。中国から来る船も瀬戸内海を通って都に行ったので、文化の要衝でもありました。また、船を狙って海賊、つまり水軍が出てくるわけです。うちの御先祖様は多賀谷水軍で、朝鮮の使節船に乗り警備賃をしっかりとらって記録が残ってる。水軍は、お金を払えばガードマンとして目的地まで連れて行ってくれる、お金を払わないと海賊に豹変して奪う（笑）、というビジネスをしていました。

それと、大三島は島自体が神様の島で、瀬戸内海で戦をしようという人たちは、みんな勝利と安全を期して、自分の身代わりとして鎧などを奉納したのね。頼朝は島に直接は来てないけれ

ども、瀬戸内海では源平合戦で平家を沈め、いろいろ怨霊もあるわけだから、自分の鎧を奉納することで鎮めようとした。義経も大活躍したから、やはり怨霊を鎮めようとして奉納した。瀬戸内海を中心に活躍した武将たちが、みんな自分の鎧を奉納したわけです。それも一番いい鎧をね。

美甘子 ● ほんと、今でもきれいな鎧です。

山田 ● 凄い芸術品でもあるし、意義も、意味もあるのね。神社なので保存状態が非常にいいし。それと、ひとつの島に国宝、重要文化財の数が、これほどあるのは日本一です。

美甘子 ● キャッチフレーズが「国宝とロマンの島、大三島」です。歴史上の人以外でも、近代になると陸軍の将校や総理大臣が来たり、そうした写真が神社にいっぱい残っています。

山田 ● 大三島に生まれたことが、彼女の歴史好きのルーツだと思うし、私も母方の祖先が海賊だったというのは、ある意味で歴史好きのルーツの半分はそこにあると思う。

編集部 ■ それを代々受け継いできたお二人が、時を超えて同じ専修大学を卒業し、ここで対談している……。

山田 ● そうそう、出身は同じ瀬戸内海で、海賊対決（笑）。

編集部 ■ 対談のタイトルは、海賊対決とか海賊対談にしますか（笑）。本当に歴史って面白いですね。

山田 ● 正直言うと、美甘子さんのプロフィールを知らなくて、今回、対談するということで見せていただいたら、大三島出身だと書いてあったから、ああ偶然だなと思ってね。ある意味とても面白いし、愉快でしたね。

TBSの『JIN -仁-』とNHKの『龍馬伝』、龍馬対決。

編集部 ■ 先程の美甘子さんのお話の中で、坂本龍馬が好きということですが。山



山田順子 時代考証家

やまだ じゅんこ ● 1976（昭和51）年、文学部人文学科卒業。1953年生まれ。広島県出身。コピーライター、CMディレクターを経て、放送作家となる。時代劇番組やクイズ番組などに多数関わり、江戸東京博物館のインタラクティブ映像なども担当。著書、多数。最新作はTBS系『JIN -仁-』の時代考証、「幕末のお江戸を時代考証！」（ベストセラーズ）。

14世紀末から16世紀末の約200年にわたって、勢力をふるった多賀谷水軍の丸谷城（多賀谷城ともいう）跡地からの展望。写真提供：財団法人蘭島文化振興財団



田さんが時代考証を担当された、TBS系『JIN -仁-』（2009年10月～12月）にも龍馬が登場しますね。

山田 ● 続編が、来年の4月から6月まで放送されます。

美甘子 ● 『JIN -仁-』は本当に面白くて大人気でしたね。特に内野聖陽さんが演じた、坂本龍馬が印象的でした。

山田 ● NHKとTBSの龍馬、個性という点では両極端の龍馬じゃないのかな。美甘子 ● 福山雅治さんは、優しい感じの龍馬ですね。

山田 ● 本物の龍馬に会えたら、内野さんが演じた龍馬のほうかなって、私は内心思ってるけどね（笑）。野性味、泥臭さという点で。龍馬は土佐という田舎の出なわけで、自分もそうだけど、

田舎の出の人の持つる泥臭さっていいのよ。内野さんは横浜育ちだから、彼自身に野性味や泥臭さがあるとは思えないんだけど、それを、よく演じきってるよね。

美甘子 ● そこがいいですね、本当に。

山田 ● 相当、勉強してみたい。土佐弁もそうだし、高知にも行って夜通し高知の人と飲んで、土佐人気質とかを相当、勉強してみたい。それと、方言指導をされた澤田誠志さんという方も、根っからの土佐人のタイプなのよ。言葉だけじゃなくて、この人はたぶん高知の人、というタイプなのよ。外の人間から見ると、土佐っぽいよねという人なの。だから、たぶん、その方の土佐魂が乗り移ったんじゃないかな。

編集部 ■ 役者さんって、そこらへんを、うまく掴まえられるかどうかですね。

山田 ● 内野さんは、それまで高知に行ったかどうかは別として、それほど知らなかったと思う。ただ、本の上で勉強するんじゃないって、その土地に行ってみる、その土地の人と触れ合うことによって、掴めるものがある。広島・愛媛生まれのわれわれだって、瀬戸内海に生まれた人間の持つる、なんとなくおっとり感というのが、他の人から見るとあると思うの。役者さんというのは上辺の演技でなく、それらを自分の中に吸い込まないとダメ。

編集部 ■ シナリオに書かれている文字だけを読んでもダメ、ということですね。

山田 ● そうそう。これは、われわれ歴史を勉強する人間もそうだけど、本とか文字の上だけの勉強じゃダメなのね。「生活感」がない。だから、美甘子さんみたいに、いつも着物を着ることも大切。着物を着るというのは、面倒くさいじゃない（笑）。ただ、過去の日本人が、ずっとやってきたことをやるのが大事なの。幸い私が時代考証家をやるのは、竈でご飯を炊いた記憶、餅を杵でついた記憶、風呂を薪で焚いた記憶、

それらがあること。そういうのは、まだ私の子どもの頃はあったから。

今回、『JIN 一仁』に高い評価をいただいた理由のひとつは、「生活感」にももの凄くこだわったから。火の起こし方、ご飯の炊き方やお膳など、時代劇だとお決まりで、おぎなりにされるところを一個一個、全部こだわったの。まな板も現代みたいに立って使うんじゃないくて、板敷きの上に座って使うとかね、そういうのを全部こだわったわけ。竈を使えば台所中が煙でいっぱいになる、これもリアルなの。灯りも蠟燭ろうそくって暗いから、仁の手術シーンは、あるだけの行燈あんどんを出してきて、それでも足りないから手燭てしよくといって、蠟燭ろうそくを立てた燭台しょくだいを持ちこんだ。そうした点を、きちんと描いたことで番組の評価も高まり、おかげ様で時代考証が良かったといわれている。なんで、こんなに評価が高かったのかな、ああ、「生活感」だと思った。

編集部 ■ 現代から江戸へ、主人公がタイムスリップするという設定でもあり、



最新作を紹介するお二人。山田順子さんは『幕末のお江戸を時代考証!』、美甘子さんは『龍馬はなぜあんなにモテたのか』

困ったとき、落ち込んだとき、龍馬が残した言葉に元気づけられます。

美甘子

なおさら生活感がきちんと出ないと、変化って出ないですよ。

山田 ● 私はそれがやれた最後の世代だと思し、これからやる方たちは大変だと思ふ。

編集部 ■ 今のお話って普通の仕事でも、非常に示唆に富んでいますね。とりわけ歴史をやりたい方は、本の上じゃなくて歩いてみる、現地に行って山城なんか登ってみる。

美甘子 ● こんな山のところまで攻めてきたの？ とかありますね。

山田 ● あるのね。私も川中島で妻女山に上がってみて、はあ？ みたいなね。この距離感？ 近いじゃんみたいな。

130周年を機に、歴史から学ぶ、伝えていく。

編集部 ■ お二人とも歴史という分野で活躍されていますが、歴史からどのようなことを学べるか、あるいは学んだら良いかを教えてください。

山田 ● お茶を一杯飲むにしろ、このお茶はどのような製法なのかを知ったり、手間暇がかかっていることを知れば、よりおいしくなる。お茶はもともと葉だったという歴史を知ると、だから身体にいいんだということを知るじゃないですか。

歴史を知ることによって、今、行われてることの意味が分かる。温故知新というけど、今をより深く知るために、そのバックにある歴史を知っていると、今がより分かる。単に表面的な今が見えるんじゃないくて、実は隠れてるものが見える。

ただ、私たちの本を読んで、何の勉強になるのかと言われても困る。単に食べ物の雑学だったり、こういうもの

を着てたのだから断片的なことだけど、それを自分の中で組み合わせて、自分の中で江戸観や戦国観をつくっていく。その作業をしない限り、ただ面白かったじゃダメなのよ。

美甘子 ● 私の場合は困ったとき、落ち込んだとき、龍馬が残した言葉に元気づけられます（笑）。自分の生き方の参考にもなります。また、龍馬を知ること、龍馬が影響を受けた先人たちの知恵なり、考えを知ることにもなります。私たちや次の世代は、それらを受け継ぎ、さらに発展させていかなければいけないと思います。

編集部 ■ そういう意味では、本学が今年130周年を迎えたということは、創立者4人が教育にかけた「志」とか「情熱」などを受け継ぎ、お二人をはじめ若い人たちが、さらに未来に伝えていかなければと思いますね。

美甘子 ● 私が入学した頃、生田に120年記念館がありました。

山田 ● 私のときは、100年だったかな。
編集部 ■ この対談の前に、神田校舎に復元された「黒門」の前で、表紙用の撮影をしましたが。

美甘子 ● かつて「黒門」があったというのは、知りませんでした。

山田 ● 今のわれわれにとって大学に行くのも、教育を受けるのも当たり前だと思います。だけど、創立当時、学校をつくろうとか、庶民の子弟でも平等に行くことができる、という意義は大きかったし、先進的な試みでしたね。そこは、威張っていいと思いますよ。

編集部 ■ その精神が、今も脈々と受け継がれているのは、素晴らしいですね。きょうは、ありがとうございました。

(神田校舎6号館にて 敬称略)